

## 民俗学研究における若干の問題

——とくに方向・技術に関して——

野口 武徳

私は成城大学で民俗学を学ぶ学生を対象において本論をまとめてみたい。

日本民俗学（以下、民俗学と略す）は非常に多くの現代的課題を抱え、これらを制限された枚数の中に収めることはたいへん困難である故に、これから私が述べんとすることは、私が日常考えている問題の一部にすぎないことを予めおことわりしたい。そしてその論点はあくまでも未来を志向した非常にマクロな捉え方で、故にある程度エッセイ風になる点もお許し頂きたい。

柳田国男先生によって紹介され、基礎が築かれた民俗学は、昭和三十七年夏に、先生が亡くなられてから、その中心を失った。それは学問的にも、民俗学界というひとつの世界の指導的人物という点からでもある。新しい学問をひとつの国に植付け、多くの研究者を全国に育てるという事業の困難さは、今さら言うまでもないし、それをなしたげた先生の偉大さも改めて説くまでもない。そこでこの偉大なる中心を失ったことは、今迄大樹の陰によりかかってこられた研究者達の間には、不安をもたらさし、周辺諸科学からの批判や、内部における反省など多くの問題を抱えている現状であるが、これもまたひとつの学問の成長過程における試練として受けとめ、我々はこれに対し、新しい考え方

を見出さねばならない。こういった民俗学の、いわば非常事態においては、学会の人間関係の体質的古さなどという小さな問題よりは、広い見方で民俗学の特殊役割を今一度認識し直すとともに、更に時代とともに推移して行く可能性を十分に持つ学問領域において、民俗学は今後どういう問題について、変化の可能性を見出さねばならないかが重要であるし、その点について、二、三、考えてみたい。

## 二、都市化・過疎化現象との関連

まず、現代の都市化、農村の過疎社会化に関する問題である。学生諸君の中にも、「こんなに都市化が進めば民俗学はやれなくなるのではないか」という疑問を発する人がいる。民俗学は現在の問題を解決するための科学であるとか、国民の反省の学であるとか、言い換えれば、現在科学であるとか、過去科学であるとか、の説は過去にもしばしば言われてきたことである。確かに現実の問題の解決のためにと柳田先生の論は理解しえたとし、民俗学が歴史的科学であるという点は、少なくとも従来の研究を見る限りにおいて否定はできない。

しかし、これは柳田先生の主張された学問の責任という

よりは研究者個人の問題であろうかと思う。つまり、あまりにも重箱の底をほじくるような研究の仕方に精力を注ぐあまり、逆に現実の問題に対する客観的な眼を失ったり、常に「昔はこうであった」という説明で自己満足し、だからこういう風に理解（解決）せねばならぬという、現実から未来を見つめる姿勢の研究者は少なかった。

一方、現実の問題や説明に追われ、かんじんの学問を忘れてしまい、やたらとジャーナリストイックになった人もある。このような過去の民俗学界の姿は、ちょっとしたデイレットタント（好事家）でも入れるような印象を他に与えたり、他の学界よりの批判などにも民俗学界として毅然たる態度もとらずに過ごしてきたりもした。これに対して、たいてい「学問が違うのだから」とか、「あの人はあまり物を知らない人だから、争うのは馬鹿々々しい」とか言う言葉が理由として付加されたりした。

しかし、このような状態であっていいものだろうか。戦後教育を受け、論争（個人的喧嘩ではない）の雰囲気になれ、その中から新しく民主主義のモラルをつかんできた若い人々が納得しうるであろうか。民俗学の目的や方法を知らない外部の人が、焦点のずれた論で民俗学に対してきた時、それが民俗学の研究領域にからむ時、はつきりとした

説明をするのが研究者のひとつの使命ではなからうかと思  
う。

ところで本題にもどるが、過疎化、都市化は種々の問題を産んでいる。過疎化は、基礎的には人口問題とそれともなう生産構造の変化であり、こんにちの高度成長の社会では避け難い問題であるが、民俗学の方から言うところ、人口構成のアンバランスにより、村落の種々の儀礼、行事の出来ない手であった青壮年層が激減し、民俗そのものの変化がおこるということ、さらに、今日の如く、生活すべてにかかわる近代化が進むと、生活の急変から老人層から次の層への民俗の伝承が断絶してしまふという現象が惹起されることである。極端にいうとあと何年かすると、日本國中、どこへ行っても同じ様な形になるのではないかという懸念である。そうすると民俗の地域的な差異から時代差をみてゆこうとする民俗学の方法に行詰まりがくるのではないかという心配である。

柳田先生の意図された民俗学の基礎理念や歴史学との差異（例えば、文書史料と民俗資料、一回性を対象とするものに対し、持続性とか、天皇・貴族を含むものに対する常民文化とか）には変化はなく、あくまでも民俗学のオリジナリテイは、変わらないだろう。しかし研究の方法や領域には変化があ

ってしかるべきだと考え、それこそ、積極的な問題を乗りこえる方向のひとつだと思ふのである。とすれば、具体的にはどんなことが考えられるか。

第一の課題は民俗の緊急調査である。今日民俗学の資料はほう大な数にのぼっており、新しい資料の発見というようなことは殆ど考えられない。けれども、まだ、離島とか、都市の周辺、さらには都市そのものなどによく調査されていない所も多い。

第二にその調査方法であるが、その調査はインテンシブな調査であるべきである。二〇世紀の英国人類学以来、インテンシブな（集約的な）調査ということがよく叫ばれ、民俗学でも、一カ所に長く滞在し、その村の人々の心意現象にまで到達しようような調査がなされてはいるが、それとも十分ではなく、たんに民俗の調査項目をまんべんなく埋め尽くしたというに過ぎないものが多い。

私のいうインテンシブというのは、そういうものではない。種々の民俗の相関関係を重視した、いわば村落の生活を構造的に把握し、たんなる民俗誌ではなく、一部落の民俗誌そのものが、ひとつの理論の提出という形をなした民俗誌である。いわば、マリノフスキーや、ラドクリフ・ブラウンの一連の研究に類するものを比較の例としてあげた

い。

第三は、緊急調査や相関関係を重視し、そこにひとつの理論をうみだせる調査とともに重要なのは民俗調査の限界をみきわめるような徹底した調査である。これは方法論とも関係してくることであるが、従来「あそこはもう調査された所だからとか、あの人達が調査している所だから遠慮しよう」などという言葉を聞くことがあるが、これほど非学問的な言葉はない。何よりも、自分自身の持つ疑問に十分応えてくれる調査報告がはたしてあるのであろうか。

学問の方法は常に可變的である。それとともに資料のとり方、扱い方も異なってくる。当然のこととして新たな疑問はおこるはずである。そういった意味で従来の幾つかの調査項目一覧に記された質問項目などは、あくまでも基本的なものとして考え、決してそれにとらわれず、自分の学問、それにより出てきた疑問にもとづいて、自分で作るべき性質のものである。一番いけないことは、既存の質問項目のアナさえ満たせば、調査を済ませたという考え方である。既存の質問項目でさえ、その一つ一つに意味が込められており、それらは先学達の長い研究の結果考えられたものであり、日本の民俗を論じようとする時に、比較のため重要なものである故に、まずは、その意味の把握から入

るべきで、ただ機械的にやるものではない。

次に、たんなる機械的な調査なら、極めて平面的な記述になってしまい、極論すると日本の村の生活は殆んど変わらない、ただ言葉が違う程度だという結果が出てきかねない。御承知の通り、いかに近代化したとしても、少し立ち入ってみると、この東京でさえ、団地と山手のお屋敷町とは、種々の違いがある。この差はいったい何かということとを、考えなければならぬ。

つまり、平面的に「何か(習俗)ありますか」と聞くと同時に、その習俗が量的にも、質的にも、その村落内での位のウェイトを持って存在しているのかということと重視することによって、その村落または、ある習俗の特性が出てくるのである。

例えば、従来の「総合日本民俗語彙」式な捉え方をする限り(もともと総合語彙は、たんなる索引であるという考え方もあるが)、その習俗は、常に等価値をもって処理されるが、はたして、そう処理できるかという疑問が当然湧いてくる。しかし、この問題は民俗学方法論における重要問題なのでここでは、省略しよう。以上のような点から言っても、「民俗誌学」という新しい分野が成り立つと思うが、その問題もここでは省略する。

第四は、文化人類学とからむ問題であるが、一民族の詳細な資料の蓄積に基づく文化理論（文化論ではない）の展開である。民俗学に理論がないという指摘がある。分類ばかりで類型化の方向が示されていないという。これは日本人の理論好きと関係する意見かもしれない。若い学生諸君に多く、その頭のきりかえに教師として苦労するところであるが、細かい事実資料に基づいて、自分の目で確かめて理論を作ったり、こわしたりして行くという民俗学研究のプロセスのもつ、かけがえのない立派な意義を理解せず、何か概論書に書かれている「まとめ」とか、誰か名の売れた人の論を紹介すると喜ぶ。

こういったものの判らない人間の言う理論などは、もちろん、論外であるが、確かに文化の構造とか変容、伝播などの理論化には、まだあまり手が染められていない。何か思いつきで、一般化してしまう傾向がないとは言えない。

資料の乏しい時代はともかく、もうこの位資料が集められてくると、新しい分野としてひとつの文化理論を志向してもよいのではなからうか。当然の問題として、外国の事例をも参考にしなくてはならないが、そこにおいては、歴史的变化関係はあまり重要ではなく、むしろ構造、および構造的変化が重視されなければならないと思う。

日本の民俗学者で論を立てる際に、やれシベリアだの朝鮮・中国だの、東南アジア、アフリカや新大陸に同じ習俗があるとか、ないとかを論じる人がいるが、それはあまり問題でない。そうではなく、いかに共通した（または異なった）構造の社会に、いかにしてその民俗が存在しているか（いないか）を論ずることが必要である。日本民俗学の研究者として、外国の民族のことを知るといふことの重要性は、「ここにもあった」というような、一九世紀の、いわば、フレーザー的な研究ではなく、論の立て方（方法論）やその構造とかかわりあいのある変化をとらえるためこそ、意味のあることだと私は考える。種族・種族文化の系統の異なる習俗を、それひとつをとりあげてもあまり意義はない。

### 三、他の周辺諸科学との関連

日本文化を研究する上で、九学会連合に加盟しているような周辺科学との関連が深いことは、言うまでもない。と  
いうより、この複雑なる日本文化の理解はひとつの学問のみでは成り立たないし、それ故に、成城大学文化史コースは、日本民俗学を軸に（何も既存の歴史学における文化史の概

念にこだわる必要はない)、日本史、東洋史、考古学、社会(文化)人類学、村落社会学、宗教学、地理学などの講義をおいているのである。理想的には方言学とか、心理学なども設けるべきかもしれないが、そこまでは現在として手がひろがらぬ状況である。とかく、日本の常民(庶民と置き換えてもらってもよい)文化、常民社会を研究するのが目的である。

米国などにおいては、歴史の浅い国故に、社会学、社会心理学、文化人類学の三つの関係は比較的に領域とか、協力態勢がはっきりしているし、またお互いが相手の学問をよく理解している故に、オーバーラップしていることも多い。

ところが、日本の場合、九学会連合調査の最近のだから、なさにも判る通り、真の意味での総合研究にはなっていない。これは日本の専門教育そのものに責任があるし、簡単には克服出来ないが、今日、出版も盛んなことであるし、組織上の欠陥を修正する努力によって、ある程度解決せねばならぬ問題と思う。

何故、こんな問題を提起したのか。例えば戦後、柳田先生が中心になって作られた民俗学研究所は多くの人材を集め、多大の成果をあげたにもかかわらず、遂に解散してしま

ったが、その理由は、財政的問題とともに、「日本民俗学の将来」と題する故石田英一郎教授の民俗学批判に対して、民俗学界内部から正面切って反論しなかった事実に対して、柳田先生が、ある意味であいそをつかされたからだとも言われる。

前にも若干触れたが、そのような例は、以前にもあった。柳田先生がお元気なうちは、先生の学問そのものが大きな防波堤の役割を果たした。しかし、先生の死後、残念ながら防波堤はくずれっ放しである。

その他、例えば、主として戦後文化人類学(民族学)の側で、特に岡正雄教授とその一部門下生達によって、くりかえし言われた、「日本社会(文化)の地域性」の論についても、かわりあいの深い日本民俗学の人々は正面切って反論すべきである。

何故なれば、異質な種族文化を基礎におくものとすれば、青森から沖縄まで、日本人・日本文化は、ホモジニアス(同質的な)なものという前提で作業をしてきた日本民俗学の方法に、多くの批判の余地を与え、人によっては日本民俗学の資料は根本的に意味がないのだというような暴論をはく学者の存在をも許すことになるからである。このような問題に対し、「あの人は民俗学を知らない」とか、

「あの人の調査は荒いから喧嘩は馬鹿らしい」とか、「学問が違ふのだから」といって、そっぽを向くのは、それこそ自慰行為と言われても仕方がない。

私はこのような問題に民俗学の研究者のはしくれとして、おおいに反論したいが、今はまだ若輩であり、それだけの蓄積はないが、ベテランの学者達にそれを望みたい。

例えば、私のアイディアにしか過ぎないが、「日本民俗学は少なくとも、歴史学という弥生式以後の文化を想定しているのだ、だから、従来の方法に基本的な誤りはないのである」というような主張である。とすれば、二つの異質的な文化複合の論自体まだ仮説の域を出ないのであるから（それを確立した論の如く採用した大野晋氏のような方もいるが）

ひとつの反論にはなるはずである。しかしそれを言う人はなく、だいいち日本民俗学は「昔は、その前は」とはいうものの、いったいどういった生産・社会構造の時代を想定して研究の体系をたててきたのかという明確な説明はなされてきていない。私は歴史学で用いる何々時代というようなことを民俗学に要求はしないし、民俗の変遷は政治の移りかわりとはちがうので、民俗学はそれでよい、という前提にたつて論じているのである。しかし縄文時代（おおよそつばに採集狩猟の経済生活）というものを想定して、従来論

が樹てられたかという、はなはだ疑問な点もある。詳細には書くスペースがないが、もし採集狩猟社会（未開社会における人類学的諸研究による）の文化というものを予想していたとすれば、考えられない論がいくつもあるからである。私は前からの考えのひとつであったが、最近偶然にも上山春平氏編『照葉樹林文化』（中公新書）によって、日本文化を論じるうえに、同じように日本の縄文文化時代の社会生活研究の重要性を考える人々のあることを知り嬉しかった。日本民俗学は縄文時代とか無土器文化の時代というものも予想せずにやっても良いものであろうか。こゝとわっておくが、私は民俗資料にしたがつて縄文時代の生活の様相をのべよと言っているのではない。ただそれを他の学問の助けを借りることによって予想することにより、その後の文化（習俗）変化の理論のたて方にいろいろ影響が大きいということを言いたいのである。私の専攻する社会組織の研究でいえば、柳田先生の論も人間の定着、村落の発生（いわば農耕社会の特徴）を前提にしてたてられているようであるが、民俗学の時代設定の目標がそれ以後にあるというのであれば、それはそれでよい（考古学とか社会学とかがそれぞれのある程度限定された時間をもつように）のだが、それを明確にした論を私はまだ知らない。

#### 四、日本民俗学と国際性

元来未開民族の文化の比較を中心に発達してきた民族学（文化ないし社会人類学）が、文明国や都市の文化をも研究の対象とするようになったことは、その間の文化の事情こそ異なれ、ヨーロッパでも米国でも同様である。またそれによって学問の内容その他もずいぶんと変化してきているというのが、こんにちの状態といつてよからう。

一方、民俗学が自国民の手による一国民俗学としてヨーロッパの先進諸国の間に発達をみたこともまた周知の事実である。そうすると現代において民俗学と民族学の基本的な差は何かということが問われてくるようになる。こういふ事態においては民俗学はその内容が厚みを持ち、民族学はラフである（というような感覚を抱いている人は少なくない）というような説明は意味を持たない。遠い未来において密度の高い自国民の手になる民俗の研究が世界の各国で起った時、それを「世界民俗学」と呼び、安易に民族学そのものとの当時に於ける結び付きをいましめるとともに、将来の可能性を予測されたのは柳田先生であった（「民間伝承論」）。

日本文化研究のひとつのあり方としての日本民俗学の独自性は残されようが、前述の如き現実を目の前にして、他の国の民俗との比較研究をいろいろな問題において、関係ないと考えるのは許されなくなってきたといえよう。とくに最初に掲げた都市化や近代化などにまつる種類の民俗の問題、社会（文化）変化の問題が目前の社会問題としてぞくぞくとおこりつつある時、それへの解決の助けとして民俗学が貢献せねばならぬ時にはなおさらのことである。

また広く世界的な視野から日本をみる時、日本もまた調査フィールドのひとつであり、その意味から日本を訪れる外国の学者は戦前から多く、とくに最近の研究論文も多い。こういふ外国の人類学者達の研究と従来の日本の民俗学の業績とをいかにつなげるか、つなぐ努力をすべきかという問題が必然的におこってくる、その時にまた「違う学問だから」とそっぽを向くわけにもいかないと思う。

ところが、このように多くのすぐれた日本民俗学の業績があるにもかかわらず、それが外国語の論文として海外に紹介された事実は全体に対してあまりにも少ないし、それも一部を除き、多くは日本の文化人類学者によって日本の民俗が紹介されているような現状である。日本語という外国

人には難解な言語と文字という特殊性が大きな理由であるが、いわば「宝の持ちぐされ」という状態であり、海外にどんどん研究成果を紹介し、学者の交流をもどんどんさかんにするというのが、日本民俗学の大きな課題のひとつといえよう。いままでは国内でなされるべき多くの問題があり、研究もできた。今後はいくらでもまだ問題は残され、研究も可能と思うが、この海外との交流をいつまでも積極的にしなくともよいという理由はなく、できるだけ早くその方向に向けてゆくことが、約半世紀をへた民俗学のひとつのステップであり、それによって新しい問題が展開するものと思う。

このような傾向、きざしはすでに芽生えつつある。一九六八年の東京でおこなわれた国際人類学・民族学会議において、東西の民俗文化に関する分科会がもたれ、はじめて多くの日本と外国の民俗学者の意見の交換がなされた。その成果は十分ではなかったが、喜ばしいことであり、その後、韓国や台湾からの研究者との交流も積極的になされつつある。

ただそこで問題になるのは、前述の如く、民俗学の研究を文化史的な比較にのみ固執しないことである。そのことは調査項目とかアプローチの範囲・方法とも関連してくる

し、たんにある特定の習俗のあるなしに限ることなく、種族系統や社会構造の差を常に認識したうえでその比較でなくてはならないと思う。最近の具体的な実例をあげると、例えば末子相続を論じる際に用いる外国の事例はたんにその習俗の分布の説明はあるが、生業や社会組織という相続とも関連の深い項目との関係は不問に付されていたり、シャマニズムの概念規定はシャマニズムの要素として *ecstasy* におくか *trance*, *possession* におくかの論義に集中して、かんじんの世界観(他界観)との関連のもとにシャマニズムの定義をどうするかとの注意はあまりみられない。私のいう外国の民俗との比較研究はこういう形のものではない。

## 五、おわりに

この原稿を書いている時、テレビは「七〇年代をどう生きるか」というテーマで主として日本の企業と、そこに働くこれからの伸びる社員のことを問題にしていた。その特集の結びは井深ソニー社長の「これからは物知りの人間より、考える人間の時代である」という言葉であった。

この言葉はそっくりこれからの若い民俗学徒にもあては

まる言葉である。過去の研究業績を一覧していただければ判ることであるが、民俗学研究のほとんど全分野にわたって論文を書いている人がいるが、これは驚異的なことであり、現在では考えられないことである。学問がまだ若い時代はともかく、専門化が進み、青年から壮年になろうとしているこんにちこういう方向はあまり望ましくなく、「ものしり」には限界があるし、真似する必要はない。それよりも自分の研究課題に関する周辺諸科学の成果とか外国における研究に徹底的に打ち込む必要がある。そしてその自己の専門の分野で理解と知識をつむことによってこそ、同じ土俵で共同の研究や討論も可能になろうと思うし、前述の九学会共同調査などの意義も表われると思う。

このことは自分の専門分野さえしつかりしていれば、他の民俗学の分野に無知であつてよいという意味ではない。概括的な知識というものは文化が相互関連のうえに複合体の一環として成り立っている以上、全体を理解しうる能力をそなえておくことはあたりまえのことであり、論外のことである。そうではなく、たとえば医者には小児科、婦人科、内科という専門があるように民俗学でも産育の専門家、婚姻の専門家というものが当然あるべきものであろうということである。小児科の医者でもある程度の急患の応

急手当に応じうること、船医や軍医などがいちおうの処理ができるように、民俗学のある分野の専門家が他の分野への理解がないというのでは困るのである。しかし専門家の重要性と、民俗学は広いから何でも知らねばならぬということはおのずから別の問題であり、もの知りになる必要はなく、問題意識をもって常に研究にあたり、他人の論を聞いたる討論したりすることが一番重要であるという点を強調して、民俗学を専攻しようとする諸君に対するむすびの言葉としたい。問題意識をもたず、もの知りに終わるのでは学問の進歩はありえない。